

カキ殻の敷設効果調査

県では、カキ殻の敷設による底質改善及び有用水産生物の資源増大に取り組んでいます。これまで浅海域（H21年敷設、倉敷市小原地先水深2～3m、図1）、沖合域（H27年～R2年敷設、備前市日生町大多府地先水深12～14m、図2）でカキ殻の敷設効果調査を行ってきました。今回は、効果の大きかったマナマコについて紹介します。

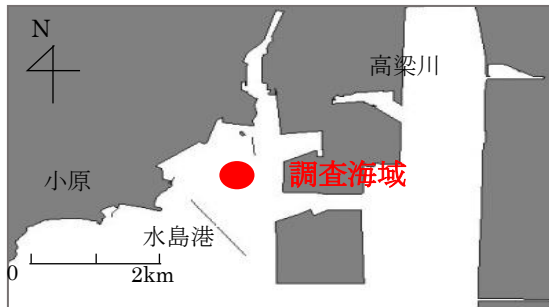


図1 小原地先調査海域

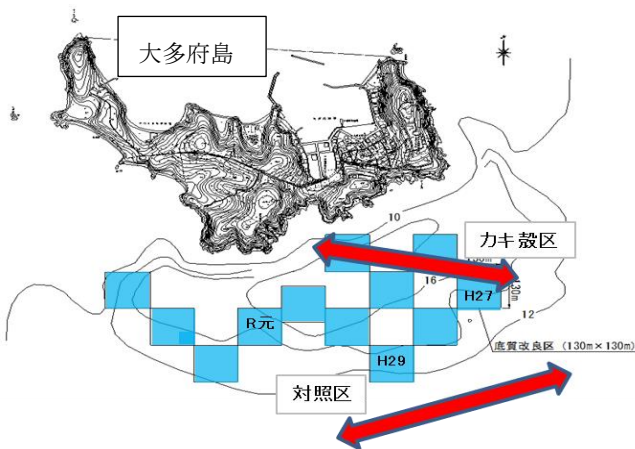


図2 大多府地先調査海域

矢印：小型底びき網の調査区域

マナマコは、漁獲物が減少する冬季の主要な水産資源であるだけでなく、砂泥中に含まれる有機物等を摂餌するため、海の掃除屋ともいわれています。高水温期には岩陰などに隠れて「夏眠」をするため、ナマコ資源を増やすには、夏眠時の良い隠れ家となる場所も必要となります。

浅海域の小原地先ではベルトトランセクト調査（潜水目視調査）、沖合域の大多府地先では小型

底びき網を用いてそれぞれ資源状況調査を行いました。

小原地先のカキ殻区では、H22年4月にマナマコが最高3.6個体/m²となり高密度で確認されました。H22年2月に確認されたマナマコは体長40～80mm（体重4～20g）の小型の個体群が多く生息していました。一方、対照区では、1尾も確認できませんでした（図3）。

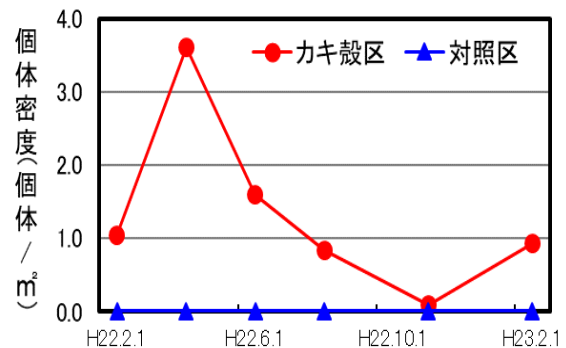


図3 浅海域（小原地先）のマナマコ密度の推移

大多府地先のカキ殻区では、R2年10～翌年3月に多くのマナマコが採捕されました。特に12月に96尾と最も多く採捕され、対照区ではほとんど採捕されませんでした。（図4）。漁獲サイズは、10月は平均142gでしたが、3月には平均317gと大型化していました。

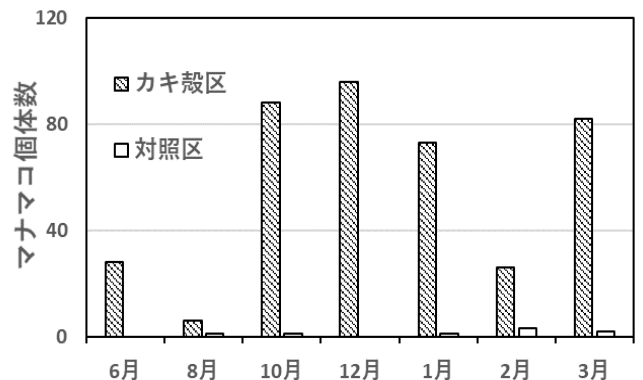


図4 沖合域（大多府地先）のマナマコ採捕数の推移

両地区ともに秋季から春季の成長期に加え、夏季にも見られたことから、カキ殻区を夏眠時の隠れ家としても利用していることが確認されました。このことから、カキ殻区は年間を通じて利用され、本種の生息環境の向上に大きく寄与していると考えられました。(漁場環境研究室：古村)